

六十九年前の夏の八月十五日、長く続いた戦争が終わりました。

東京をはじめ多くの都市は焦土しょうどと化し、たくさんの方が亡くなりました。あれから六十九年の月日経ち、日本は平和を保ってきました。

しかし、世界中では戦火やが止むことはありませんでした。

兵士は戦線に送られ、敵軍の兵士と傷つけあい、斃れたお、また戦場となった地域の人々が戦闘に巻き込まれ、命を落としています。

戦争はなぜ起こるのでしょうか？

その答えには、さまざまなものがあると思います。

社会の仕組みの問題であるとか、政治の暴走ではないか、いや、資源の争奪が根本にある、など、さまざまな立場から、多くの意見が出てきます。

では、仏教では、どうでしょうか。

次のようなお釈迦さまの言葉があります。

「勝利からは、怨みうらが起こる。敗れた人は、苦しみながら眠りにつく。

勝ち負けを捨てて、安らぎに帰った人は、安らかに眠りにつく。」

お釈迦さまは、戦争について大上段たいじょうだんに語っているわけではありません。勝ち負けにこだわるという、私たちの心を問題にしています。

勝ち負けだけではありません。瞋りいかや 貪りむさぼ、疑いうたがや嫉妬しつとといった自分の心のはたらきを見つめ、そこから離れることができた時、私たちは安らかに眠りにつくことができると、お釈迦さまはお示しなのです。

争いの原因は、どこにあるのでしょうか。

戦争の種たねは、私たちの心にあるのです。

しかも、家族の間や友だちの間といった身近な場所で、それぞれの自己中心的なふるまいによって生じるいさか 諍いこそが、大きな戦争の原型なのです。私たち自身が、身近な家族や友達、そして社会の中などでの争いを乗り越える努力をし、その努力を大きく広げていく時、大きな戦争も遠ざけることができるのです。

戦後六十九年、日本は平和を保ってきましたが、果たして私たちの心の平和は保たれてきたのでしょうか。

大きな戦争がない状態というだけでは、ほんとうの平和とはいえないのです。
一人一人がそれぞれの努力によって心の平和を実現する時、真に平和である、といえるのではないのでしょうか。

— 終 —